

残っていた！古墳時代後期の前方後円墳

JR 帯解駅の東側一帯は、重要な古墳が多くある地域として知られており、5世紀の鉄製武器・武具が出土したベンシヨ塚古墳や円照寺墓山1号墳などがあります。また、7世紀の帯解黄金塚古墳は、溶結凝灰岩の板状石材を積み上げた「磚積」の横穴式石室がある古墳として知られています。

上ノ山古墳は黄金塚古墳の東約450m、奈良市と天理市の市境にある古墳で、奈良市教育委員会が平成26年に、老人ホーム新築に伴って発掘調査を行いました。

再発見された上ノ山古墳

調査当時の奈良県遺跡地図では、上ノ山古墳は消滅した無名の古墳となっていました。ところが、明治26年の「大和古墳墓取調書」には、字上ノ山に約539㎡、高さ約4.5mの古墳として絵図とともに記されています。また、大正14年の「奈良懸史蹟名勝天然記念物調査報告8」には、上ノ山が約198㎡の方形の古墳であると記されています。つまり、この間に古墳が削られたことが史料から読み取れ、これ以降の時期に消滅したものとして認識されたことがわかります。しかし、発掘調査前に行った測量調査によって、墳丘の高まりと円筒埴輪片の散布を確認し、部分的に古墳が消滅を免れていることが明らかになりました。

うまのやま たなか
上ノ山古墳(奈良市田中町)



上ノ山古墳の位置 (S=1/25,000)

上ノ山古墳の発掘調査成果

発掘調査で、前方後円形を呈する幅約5mの周溝を確認しました。残存する墳丘は、ほぼすべてが天理市側です。古墳の時期は、周溝から多数出土した土器や埴輪から、6世紀前半～中頃と考えられます。規模は、前方部が削られていたため不確定ですが、後円部径約27m、前方部長7m以上、全長34m以上の前方後円墳に復元できます。

また、古墳の北側に広がる平坦面では、古墳よりやや時期の下る7世紀前半の総柱建物、多量の溶結凝灰岩を埋土の上に投棄した井戸などが見つけられました。井戸から出土した溶結凝灰岩は黄金塚古墳の墓室石材と共通し、両者の繋がりを示すものとして考えることもできます。



上ノ山古墳 遠景 (北東から)



上ノ山古墳 墳丘調査区 全景 (北西から)

※掘削部分は周溝の検出範囲

多様で特殊な埴輪

周溝から、墳丘に立て並べられたと考えられる多種多様な埴輪が出土しました。円筒埴輪は、タテハケ調整で、4条突帯5段構成に復元できます。形象埴輪は、大部分が前方部周辺から出土しました。全体を復元できたものは少数ですが、種類は多く、蓋・穀・石見型・馬・鳥・巫女その他、家や盾持人の可能性がある破片も見つかっています。

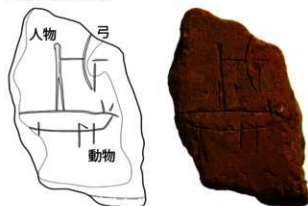
なかでも注目すべきものとして、家形埴輪と推定される破片の表面に、動物と矢を射る人物が描かれた絵画埴輪があげられます。絵画は、狩猟の場面、あるいは騎射を行う人物を表現したものとみられますが、解釈が分かれていて、このような絵画が描かれた埴輪は、全国で初めての出土例です。もし騎射の表現だとすれば、5世紀から積極的に武器や武具を導入していた帯解の地域性を示すものかもしれません。

須恵器からみた上ノ山古墳の被葬者像

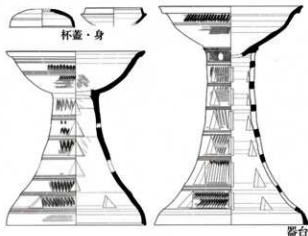
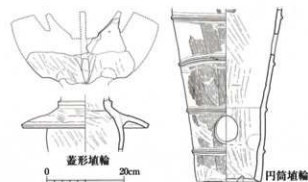
出土した須恵器には、杯蓋・高杯・甕・壺・器台があり、ほとんどが前方部から出土しました。形態から、6世紀前半～中頃に位置づけられます。

なかでも、甕と器台が上ノ山古墳を考える上で重要な情報をもたらしました。器台はいずれも破片ですが、口縁部や脚部が最低でも5個体分見つかっています。奈良県内では、葛城市の大和二塚古墳で5個体、平林古墳で4個体と、ひとつの古墳から複数個体を確認した事例はありますが、1～

2個の出土が一般的です。複数個体を確認できる古墳はいずれも地域首長墳であることから、上ノ山古墳もこれらに匹敵する首長墳である可能性があります。このことは、復元口縁部径約51.4cm、復元高約104cmの大型甕が出土していることからもうかがえます。6世紀の古墳は、埋葬施設である横穴式石室の規模や副葬品から被葬者像が見えてきますが、前方部上に多数の須恵器を配置し、形象埴輪を立て並べた葬送儀礼から、上ノ山古墳の被葬者は地域を代表する権力の持ち主であったといえるでしょう。



絵画埴輪



出土遺物 実測図 (S=1/10)



上ノ山古墳出土遺物